

スペイン語では  $v > b$  という変化が起こり、 $v$  がなくなった。(綴りの上では  $v$  を保っていても発音は  $[b]$  である。)

## 2.4.2 分裂 split

ラテン語の  $[k]$  は、イタリア語で後舌母音の前では  $[k]$  のままであったが、前舌母音の前では  $[tʃ]$  となった。中英語の  $/u/$  は  $/ə/$  と  $/u/$  に分裂し、 $run$   $[rɛn]$  と  $put$   $[pʊt]$  のような違いができた。モンゴル系のブリヤド(ブリヤート)語では  $s$  が音節頭で  $h$  に、音節末で  $d$  に変わり、 $sara > hara$  (月)、 $ulus > ulad$  (国) のように変化した。

## 3 形態変化 morphological change

### 3.1 類推 analogy

共通語において「見る・食べる」などの1段動詞(母音語幹動詞)と不規則動詞「来る」は、受身形も可能形も「見られる・食べられる」、「来られる」で、同じ形である。それに対して、「取る・切る」などの5段動詞(子音語幹動詞)は、受身形は「取られる・切られる」、可能形は「取れる・切れる」と区別される。それらからの類推で1段動詞の一部と不規則動詞「来る」に「見れる・食べれる」、「来れる」といった新たな可能形が生まれてきている。本来  $mi-$ 、 $tabe-$  に  $rare-ru$  の付いた  $mi-rare-ru$ 、 $tabe-$

$rare-ru$  が<sup>3</sup>、 $tor-are-ru$ 、 $kir-are-ru$  (受身) と  $tor-e-ru$ 、 $kir-e-ru$  (可能) からの類推で  $mir-are-ru$ 、 $taber-are-ru$  のように解釈されて、そこから  $mir-e-ru$ 、 $taber-e-ru$  が作られたのである。

また、「見せて(くれ)！」というところを「見して!」と言うことがよくあるが、それも類推と考えられる。たとえば、5段動詞の使役形には「やらせる・書かせる」のほかに、使用は限られるが「やらす・書かす」のような形も持つものがある。それらのテ形はそれぞれ「やらせて・書かせて」と「やらして・書かして」である。「見せる」のテ形は「見せて」であるので、「やらせて・やらして」、「書かせて・書かして」などからの類推によって「見せて」から「見して」が作られたと考えられる。

現代英語の  $help$  (助ける) に当たる語は古英語で  $helpan$ 、 $healp$ 、 $holpen$  という形を持っていたが、規則変化の動詞からの類推でそれが現代英語では  $help$ 、 $helped$ 、 $helped$  となった。

ラテン語で「労働」を意味する語は  $s$  が母音間で  $r$  に変わった。その結果、次の表に示すように  $labōsem > labōrem$ 、 $labōsis > labōris$  という形ができ(段階2)、最終的に母音間でない  $s$  も  $r$  になって  $labos > labor$  という形ができた(段階3)。

	段階1	→	段階2	→	段階3
単数主格(〜が)	labos		labos		labor
単数対格(〜を)	labōsem		labōrem		labōrem
単数属格(〜の)	labōsis		labōris		labōris

### 3.2 異分析 metanalysis

語が本来の切れ目とは異なったところで切られ、その結果新しい語形が生まれることを異分析という。英語の  $nickname$  (ニックネーム) はもともとは  $ekename$  であったが<sup>3</sup>、 $an\ ekename$  が  $a\ nekename$  ( $a$

表1

	5段動詞	1段動詞	
		本来の形	新しく生れた形
受身形	$tor-are-ru$	$mi-rare-ru$	→ $mir-are-ru$
可能形	$tor-e-ru$	$mi-rare-ru$	<b><math>mir-e-ru</math></b>